太宰府市の文化財第64集

奥園遺跡

—第2・3次調査—

2002

太宰府市教育委員会

序

太宰府市は大陸の玄関口として古代から国内外との交流が盛んに行われていました。この由緒ある本市では国立博物館の建設工事が進められ、開館に向けて今後さらに周囲の整備も進むものと考えられます。そして、博物館建設によって、アジアへの玄関口として古代大宰府と同じく大陸との交流が活発になることが期待できます。

今回報告する奥園遺跡第2・3次調査は、国立博物館建設地の南西部に位置し、住宅の建設に伴って実施したものです。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

最後になりましたが、文化財に対してご理解頂きました皆様をはじめ、関係諸機関の皆様方に心よりお礼申し上げます。

平成14年3月
太宰府市教育委員会
教育長　關　敏治

例言

1. 本書は太宰府市宰府2丁目、石坂1丁目に所在する奥園遺跡第2・3次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測には、国土調査法第II座標系を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限りG.N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。
3. 遺構の実測及び写真撮影は城戸康利、宮崎亮一が行った。
4. 遺物の実測は担当者のほか森田レイ子が行った。
5 遺物の写真撮影はフォトハウスおか（代表岡紀久夫）が行った。
6. 図の浄書は宮崎が行った。
7. 本書に用いた陶磁器分類は『大宰府条坊跡XV』に基づいている。
8. 本書の執筆は第III -1を城戸、その他を宮崎が行った。
9. 編集は、宮崎が担当した。

目次

I、調査体制 ……1
II、遺跡の位置と環境 ……2
III、調査報告
1、第2次調査
(1) 調査に至る経過 ……4
(2) 現況と層位 ……4
(3) 検出遺構 ……4
(4) 出土遺物 ……6
(5) 小結 ……7
2、第3次調査
(1) 調査に至る経過 ……7
(2) 現況と層位 ……7
(3) 検出遺構 ……7
(4) 出土遺物 ……12
(5) 小結 ……16
IV、調査まとめ ……16

I、調査体制

奥園遺跡第2次調査

（平成7/1995年度）・・・・・発掘調査

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	白木三男
	文化課長	花田勝彦
	文化財保護係長	高田克二（～7年5月31日）
		和田敏信（7年6月1日～）
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治
		川谷　豊
	主　　事	今村江利子
調査	技術主査	山本信夫
	主任技師	狭川真一
		城戸康利（調査担当）
		山村信榮
		中島恒次郎
		重松麻里子（～7年6月30日）
	技　　師	井上信正
		高橋　学
	技師（嘱託）	下川可容子

奥園遺跡第3次調査

（平成11/1999年度）・・・・・発掘調査

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥（～6月30日）
		白石純一（7月1日～）
	文化財課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫
	主任主事	藤井泰人
		今村江利子（～6月30日）
		野寄美希（7月1日～）
	嘱　　託	鈴木弘江
調査	技術主査	城戸康利
	主任技師	山村信榮
		中島恒次郎
		井上信正
	技　　師	高橋　学

		宮崎亮一（調査担当）
	技師（嘱託）	下川可容子
		森田レイ子

（平成13/2001年度）・・・・・整理報告

総括	教育長	關　敏治
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	木村和美
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	神原稔
	事務主査	藤井泰人
	主任主事	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利（整理担当）
	主任技師	山村信榮
		中島恒次郎
		井上信正
		高橋　学
		宮崎亮一（整理担当）
	技師（嘱託）	下川可容子
		森田レイ子
		佐藤道文

II、遺跡の位置と環境

奥園遺跡は太宰府から筑紫野市吉木に抜ける県道筑紫野・太宰府線の道筋に位置し、この道は近世から甘木方面から太宰府天満宮に入る主要道路であった。その市境に位置する石坂峠（標高87m）は、別名泣き別れ峠ともいい、峠に降った雨は東側は有明海に、西側の雨は博多湾にわかれるので泣き別れ峠と呼ぶようになったといわれている。一説にはさいふ詣に来て一晩泊まり、遊女と遊んだ人を遊女がここまで送り、泣いて分かれたためともいわれている。

石坂峠を下りた平地に今回報告する調査地が存在する。調査地周辺の試掘調査では、谷地形や削平された土地が確認されるだけで、遺構密度が低い土地も多い。その峠から太宰府側（西側）に続く低丘陵は、現在住宅地に変わっているが、住宅地の中に残る中ノ峰丘陵西斜面からは、12世紀中頃から14世紀前半にかけての木棺墓や土壙墓が調査されている（『馬場遺跡』太宰府市の文化財第41集1999）。奥園遺跡第1次調査では、平安時代後期を中心に、奈良時代から平安時代末までの遺構を検出している。また、奥園遺跡2次調査と3次調査の中間に位置する馬場遺跡第2次調査では、11世紀後半～12世紀前半の南北溝が確認され、政庁跡は廃絶しているこの時期に、古代条坊制とは異なる新しい都市区画が整備された状況を窺わせる遺構として注目される。しかし、奥園遺跡周辺の調査例は少なく、周辺地域の歴史の全容を知るには、資料に乏しい状況である。

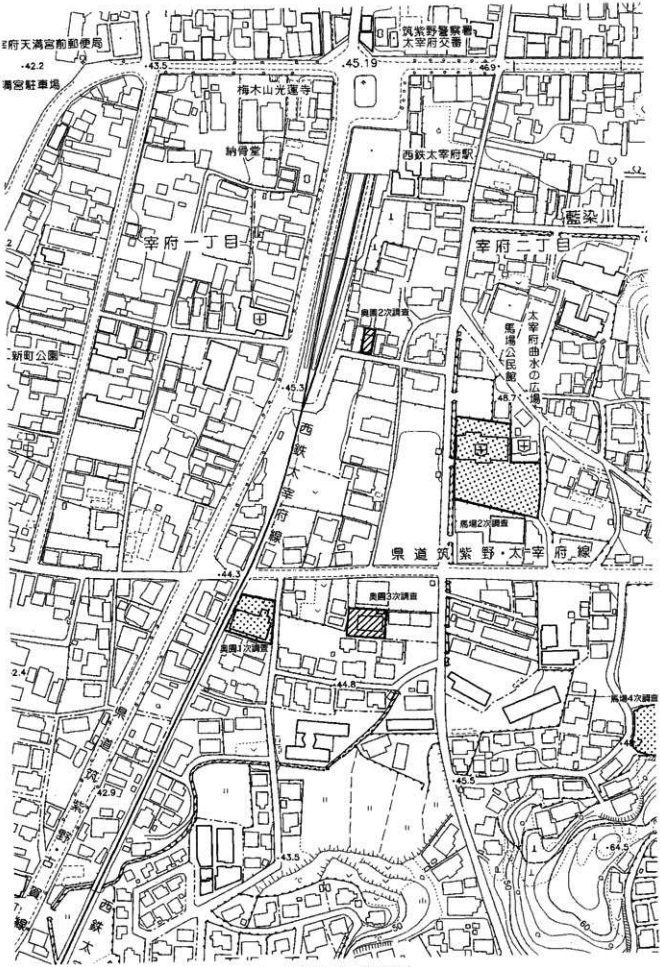


Fig.1　位置図（1／2,500）

III、調査報告

1、第2次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市宰府2丁目3342-5、3343-8に所在する。1995年1月12日に当該地において個人住宅建設（鉄骨造）にあたっての埋蔵文化財の照会がナショナル産業株式会社・所有者田原深雪氏から本市教育委員会文化財課に行われた。同年1月24日に設計内容についての協議を行い、同年4月25日に確認調査を実施した。その結果、現地表面下0.8mで遺構面が確認されたため、地権者と協議を行い本調査に入ることで合意を得た。

調査は1995年10月23日から同年11月20日まで実施し、城戸康利が担当した。調査対象面積は107.12m²、調査面積は90m²である。

(2) 現況と層位

調査地は南北に長い15×7m程度の長方形をしており、短辺の間口を除いて三辺を住宅に囲まれている。現況地表面から遺構面まで浅かったので表土を片側に積み上げ、反転して調査を行った。

地表面から約0.4mは宅地にするために行われた現代の盛り土で、その直下にはそれ以前の耕作面が残存していた。その耕作土と床土を除くと約0.2mの茶灰色土層があり、これが包含層となっている。それを除去すると遺構面が現れる。この面は黄灰褐色土層で水成堆積層である。少しの遺物を包含していたため、遺構面の精査後、掘削したが白色の砂層や角礫を含む暗褐色砂層に至り無遺物層と判断されたため、黄灰褐色土層より下層は地山と判断した。黄褐色土層下面には遺構は検出できなかった。

(3) 検出遺構

調査面積が狭小の割に中央に大きな遺構があり、調査区で遺構の性格を判断するのは困難であった。

溝

2SD001 調査区北端で東西約3.6m分を検出した。調査区東端で北へ折れ曲がっている。東側に窪み状に深い部分がある。深さは西側で約0.1m、東側で約0.4mである。埋土は暗茶褐色の単一土層である。遺物は出土していない。

2SD005 調査区中央で長さ約4.6m分にわたり検出した東西の溝である。幅約5.4m、深さ0.4～1mを測る。大きく2層になっており上層は灰茶色土、灰褐色土である。反転前の北側はこの面で止まっている。下層は黄灰色シルトから細砂、粗砂へと変化する。この部分は溝というより流路が埋没したものと考えられる。したがって上層の灰茶色土、灰褐色土は下層の流路が埋没した後の窪みに堆積したたまり状の遺構の可能性もある。

2SD007 調査区南端で検出した溝である。2SD009を切っている。長さ約3m、幅約0.4m、深さ約0.1mを測る。振れは約N-82°24′20″-Wであり、現状の南側道路の振れに近い。

2SD009 調査区南端で2SD007に重なるようにして検出した溝である。長さ約3.4m分を確認し、幅は0.4m以上、深さは0.5m程である。2SD007とほぼ並行である。南側の肩は調査区外で確認できていない。

その他の遺構

2SX002 調査区北端で検出した。2SD001を切っている。径0.5m以上の遺構と考えられるが、大半が調査区外にあるため詳細は不明である。

2SX004 2SD001を切っている小穴である。円形を呈し、径約0.3m、深さ約0.15mを測る。

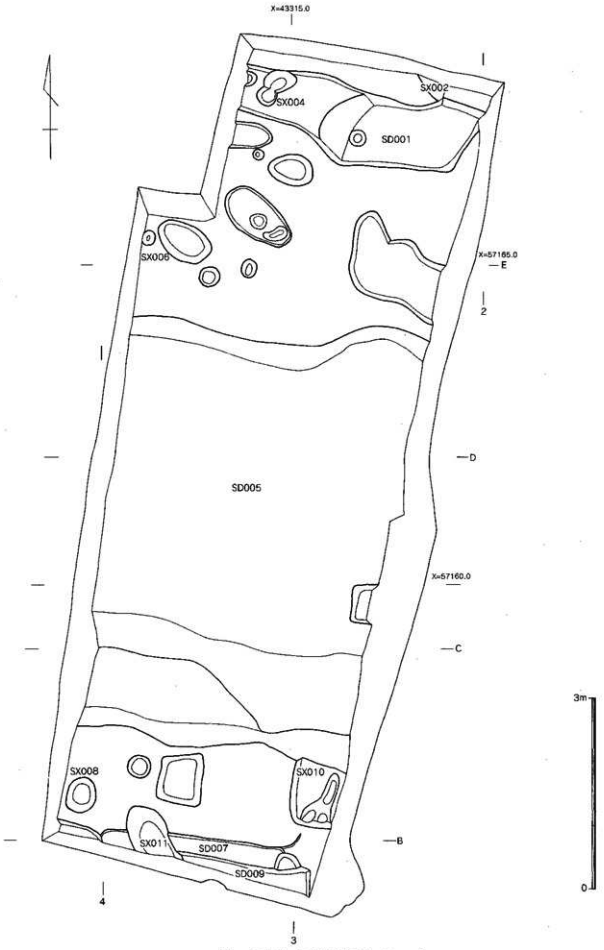


Fig.2　第2次調査遺構配置図（1/60）

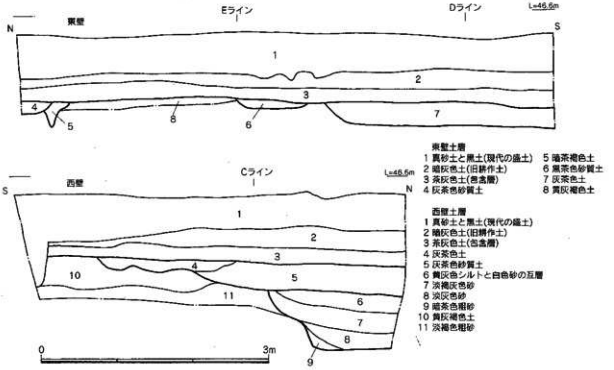


Fig.3　第2次調査区壁面土層実測図（1/50）

2SX006　調査区西側で検出した小穴である。円形を呈し、径約0.2m、深さ約0.25mを測る。

2SX008　調査区南西隅で検出した小穴である。円形を呈し、径約0.5m、深さ約0.2mを測る。

2SX010　調査区南東側で検出した方形もしくは長方形と考えられる遺構である。2SD005に切られており、南北1m以上、東西0.8m以上の規模になる。底面は凹凸があり、深さは浅いところで約0.1m、深いところで0.3mを測る。

2SX011　調査区南側で検出した。2SD007・009に切られている。楕円形もしくは長円形をした遺構と考えられる。長辺1m以上、短辺0.6m程で、深さは0.4mを測る。

(4) 出土遺物

遺物量は全体でもコンテナケース1箱にも満たない。土師器の破片を中心に中世の輸入陶磁器や鉱滓、焼土塊が出土している。なかでも2SD005や茶灰色土（包含層）での遺物が多数を占めている。以下、分類のない遺物について図示している。

第2次調査出土土器（Fig.4、Pla.4）

陶磁器（1～3）　1は白磁である。器種不明であるが、瓶様のものの底部と考えられる。底径は5.4cmに復元される。台形状に高台から底部を作り、角部分に体部を貼り付けている。そのため内底部には接合跡が明瞭に残っている。調整はナデである。全面を施釉後、底部の釉を掻き取っている。素地は灰白色を呈し、きめ細かい。釉は灰緑色味を帯びた半透明釉で光沢がある。2は白磁もしくは瀬戸産の陶器と考えられる。椀の体部片である。内面に菊花様の文様がスタンプされている。素地は黄白色を呈し、きめは粗く砂っぽい。釉は内外とともに施され、淡い灰緑色を帯びた透明釉である。光沢があり貫入が入る。3は李朝期の青磁で、壺類の底部片である。高台部分は径8.8cm程度と推定される。外面は施文される。圏線と印刻スタンプ文に白土の象嵌を行っている。素地は明灰色を呈し、きめ細かいが微細な白

色の粒子を含む。釉は全面になされている。灰色を帯びた半透明釉である。

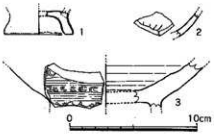


Fig.4　第2次調査出土遺物実測図（1/3）

(5) 小結

調査面積が狭小で、2SD005が調査区ほぼ中央に位置するため、遺構の全体的解釈は困難である。

遺構群の時期は出土遺物が少ないことから限定することが難しいが、およそ平安時代後期から南北朝時代と考えられる。溝群は東西方向で近い振れを示しており規則性が感じられる。

調査地から北へ約100mで近世宰府宿へ入るため、中世後半から近世の遺構を期待したが検出できなかった。今後、本調査地周辺の調査が進行することを待ちたい。

2、第3次調査

(1) 調査に至る経過

1999年1月20日に拝形栄之助氏所有の石坂1丁目3210-5、3210-21の土地について、（株）蓮建築研究所から共同住宅建設に先立つ問い合わせがあり、2月18日に試掘調査を行い、遺構が確認された。3月1日から地権者と調査期間や調査費用等について協議を重ね、家屋の解体後5月14、15日に改めて試掘調査を行い、遺構面の再確認を行った。調査は1999年7月6日から1999年7月21日にかけて実施し、宮崎亮一が担当した。対象地は盛土が著しく安全性等から、調査面積は縮小せざる得なかった。調査対象面積は595.82m²、調査面積は150m²である。

(2) 現況と層位

職後すぐまで道路よりかなり低い田圃であった。盛土が厚く旧耕作土の面までは約2mあり、20cmの耕作土の下が遺構面である。調査地は東側の石坂からつづく谷地形の先端付近に位置し、遺構は灰色土や灰茶色土などの堆積層に遺存している。

(3) 検出遺構

掘立柱建物

3SB001（Fig.7、Pla.6・7）

3間×3間で、N-9°40′-Eの建物。掘り方は小さく、深さが0.1～0.28m程しか残っていない。埋土の土層から径0.13m前後の柱痕跡が確認できる。

3SB015（Fig.8、Pla.6・8）

3間×2間以上で、北側の調査区外につづく、N-75°1′-Wの建物である。掘り方は小さく、埋土の土層から径0.13m前後の柱痕跡が確認できる。

土坑

3SK003

調査区東端で確認され、調査区外に続いている。

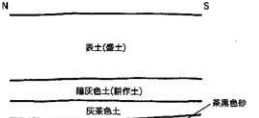


Fig.5　第3次調査土層模式図

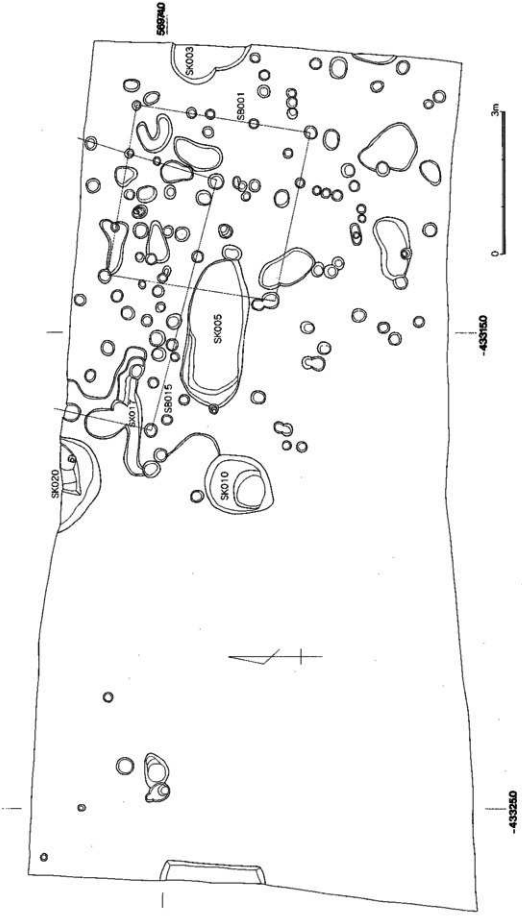


Fig.6　第3次調査遺構配置図（1/80）

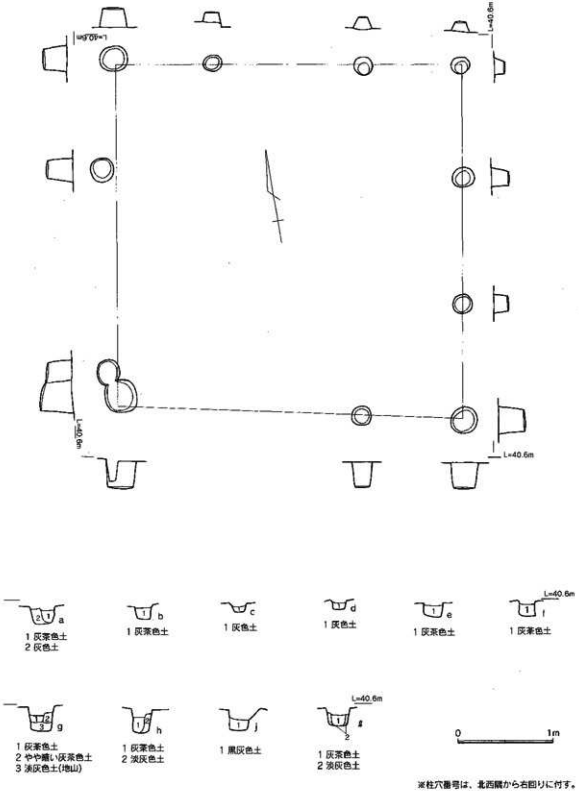


Fig.7　3SB001遺構実測図（1/40）

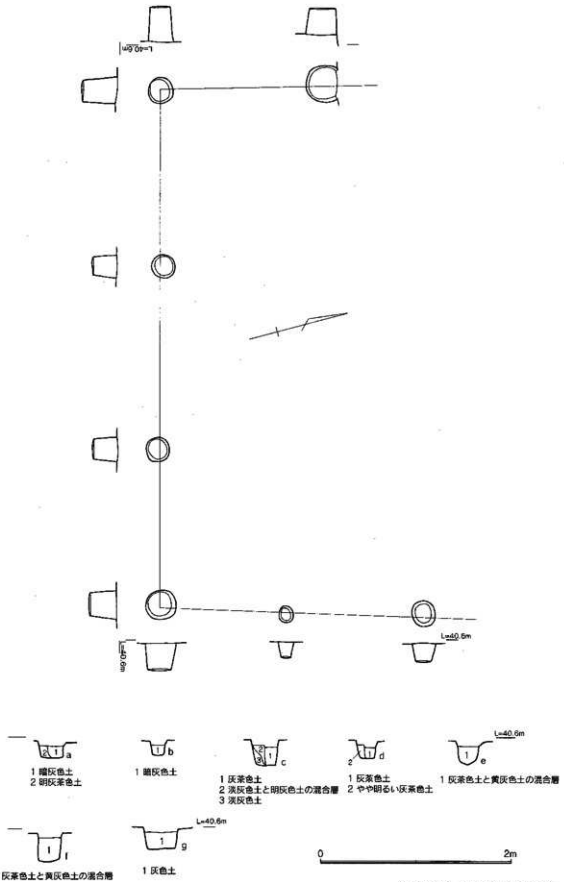
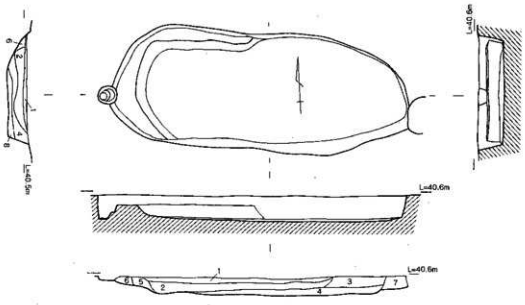


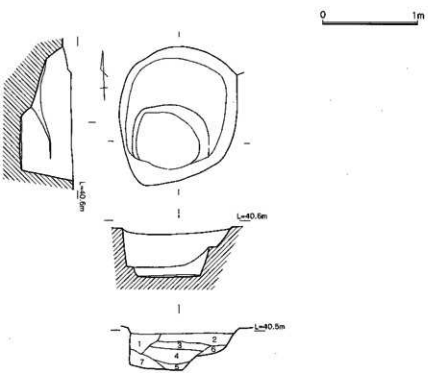
Fig.8　3SB015遺構実測図（1/40）

SK005



1 灰黄色土
2 黒灰色土と暗灰色土の混合層
3 暗灰色土
4 淡灰茶色土
5 やや濃った灰色土
6 やや白い灰色土(細かい土)
7 5と同じ
8 灰色細砂

SK010



1 黒灰色土まじりの灰色土
2 灰色土
3 やや明るい暗灰色土
4 黒灰色土(黒色土含む)
5 明灰色土(地山?)
6
7 地山(掘りすぎ)

Fig.9　3SK005・SK010遺構実測図（1/40）

南北は他の土坑と切り合っている。南北約1m、東西0.8m以上を測る。

3SK005（Fig.9、Pla.9）

南北1.25m、東西3.12mを測る。遺構検出した段階では、長方形の不定形プランであったが、一段掘り下げた段階で、西側に明瞭な方形状のプランが確認できた。しかし、東側では不明瞭で、埋土の堆積状況や遺物に破片が多いことから墓の可能性は少なく、廃棄土坑と考えられる。土坑の底面から浮いた状態ではあるが、須恵質鉢が伏せたような状態で出土し、その鉢の口縁部に並べるように石鍋の破片が出土したため、意図的に置かれた可能性も考えられる。

3SK010（Fig.9、Pla.10）

南北1.44m、東西1.24mを測る。円形プランで、遺物が埋土の上位で比較的多く出土している。

3SK020（Fig.10、Pla.11）

調査区際で北側に遺構は続いている。井戸のようなプランであったが、全容が不明なため、土坑として報告する。

その他の遺構

3SX017

SK020の上面を覆う不定形な溜まり状の遺構。深さは平均0.05m前後だが、南側が深さ0.23m前後の溝状になっている。

(4) 出土遺物

土坑

3SK003出土土器（Fig.11）

土師器

小皿a（1、2）　復原口径はそれぞれ9.4cm、9.0cm。回転糸切り。1の口縁部に粘土を加えたような痕跡が残る。

坏a（3）　内外面とも摩滅し、調整等は不明。復原口径14.9cm、器高2.8cm、復原底径10.6cm。

須恵質土器

捏鉢（4、5）　4は復原口径29.0cm、口縁部外面が帯状に黒灰色を呈し、一部自然釉がかかっている。体部上面は回転ナデ。下部はナデ調整している。東播系。5は口縁端部内外面が青灰色を呈する。東播系。

3SK005灰茶色土出土土器（Fig.11、Pla.13）

土師器

坏a（6）　底部付近で、復原底径11.0cm。底部糸切り。内面底部はナデ。その他は回転ナデ。外面下端の一部に煤が付着している。

須恵質土器

捏鉢（7）　口径31.3cm、器高10.4cm、底径9.6cmを測る。片口部は内面から外方向に指圧によって押し出し、整形している。内外面ともナデ調整を行い、外面底部には枝葉のようなものが残り、やや粗いナデを施す。内面底部付近は使用したことにより調整痕が摩滅している。

3SK005暗灰色土出土遺物（Fig.11）

土師器

小皿a（8）　復原口径8.8cm、器高0.8cm、復原底径6.4cm。底部切り離しは糸切りか。

坏a（9）　底部のみで、復原底径12.4cmを測る。外面底部は糸切り。底部と体部の境はやや丸い。

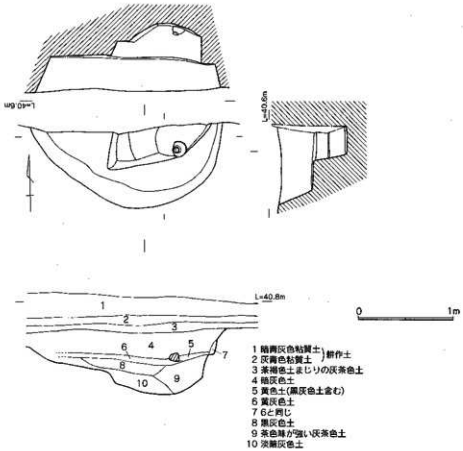


Fig.10　3SK020遺構実測図（1/40）

瓦加工品

瓦玉（10）　2.7cm×2.3cm、厚さ1.8cm。色調は灰色を呈し、全体的に摩滅が著しい。

3SK005黒灰色土出土土器（Fig.11）

土師器

坏a（11）　復原底径10.2cmを測る。底部糸切り。体部はやや丸味を帯びている。胎土は比較的精製されている。

丸底坏a（12）　復原口径17.5cmを測る。体部は底部を押し出し、それを消すように外面にはミガキcを施している。内面にも左斜めに上がるようにミガキcが、明瞭に残っている。

3SK010出土遺物（Fig.12、Pla.13）

須恵器

小蓋（1）　復原口径7.6cm、器高0.6cm。上面は回転ヘラ切りし、板状圧痕を残す。内面はナデられ、口縁部付近は回転ナデを施す。色調は灰色で、口縁端部は青灰色を呈する。ツマミがあった可能性も考えられる。

土師器

小皿a（2～5）　復原口径9.2～9.8cm、器高1.1～1.4cm、復原底径6.8～8.1cm。底部切り離しは摩滅しているが、回転ヘラ切りである。

坏a（6～8）　復原口径15.0cm、15.4cm、器高2.5cm、2.6cm、復原底径10.6～11.2cm。底部切り離し

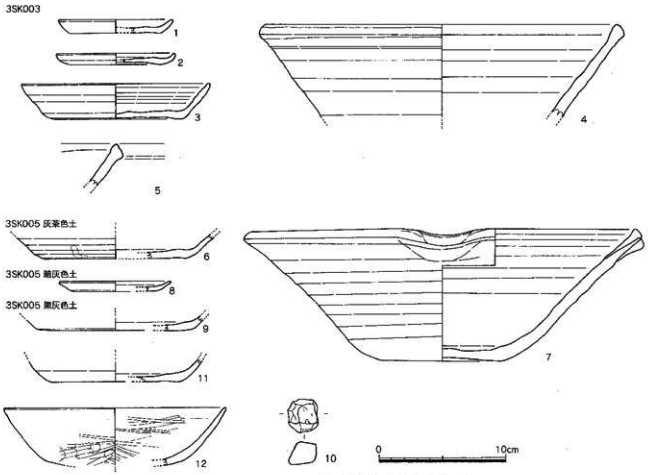


Fig.11　3SK003・005出土遺物実測図（1/3）

は回転ヘラ切りで、板状圧痕を残す。内面は不定方向のナデ、外面はヨコナデを施す。

蓋（9）　復原口径9.2cm、器高3.0cmを測る。天井部外面は回転ヘラ切り後、ナデ調整している。その他はヨコナデ。色調は橙茶灰色を呈している。

瓦器

椀c（10、11）　底部には低い三角形の高台を貼付する。高台径はそれぞれ7.5、6.8cmに復原できる。10は体部外面に指頭圧痕のような痕跡が残り、内面にはヘラミガキが僅かに残る。

瓦質土器

捏鉢（12、13）　12は口縁部で小片のため正確さに欠けるが、口径24.5cm程に復原できる。13の内面はナデとハケ調整、体部外面は手持ちヘラミガキを行い、底部付近は手持ちヘラケズリを行っている。12と接合できないものの、同一個体の可能性が十分考えられる。色調は黒色を呈し、焼成も良好。

高麗青磁

椀c（14）　全面施釉され、高台外面は釉を削り取っている。釉は淡く灰緑色を帯びるが、白濁し不透明である。全体的に細かい気泡が目立つ。高台はケズリ出しでやや粗い。見込みには目跡が4ヶ所残る。III-1類。

瓦加工品

瓦玉（15、16）　15は2.7×2.85cm、厚さ2.2cm。色調は明るい青灰色を呈する。16は2.5×2.4cm、厚さ1.75cm。色調は茶灰色を呈する。

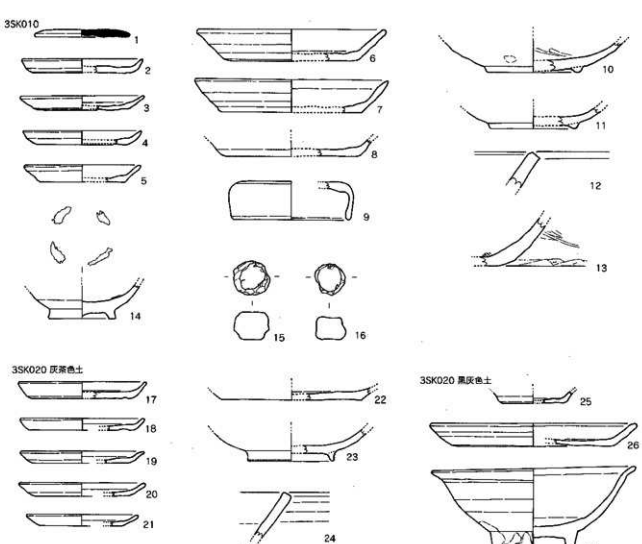


Fig.12　3SK010・020・SX017出土遺物実測図（1/3）

3SK020灰茶色土出土土器（Fig.12）

土師器

小皿a（17～21）　復原口径8.8～10.1cm、器高0.9～1.2cm、復原底径6.5～8.0cm。底部切り離しは確認できるものは全て糸切りである。内面はナデ、その他はヨコナデである。

坏a（22）

瓦器

椀c（23）　外面には底部押し出しの痕跡と考えられる凸凹が残るが、摩滅している。復原高台径6.8cm。

須恵質土器

鉢（24）　口縁部の小破片で、内面表面は剥落している。外面はヨコナデ。色調は白灰色を呈する。

3SK020黒灰色土出土遺物（Fig.12、Pla.13）

土師器

小皿a（25）　底部付近のみで、復原底径4.9cm。板状圧痕を残すが、底部切り離しは不明。胎土は精製されている。

坏a（26）　復原口径16.2cm、器高1.8cm、復原底径12.6cm。底部切り離しは糸切りで、板状圧痕を残す。内面底部はナデ、その他は回転ナデを施す。胎土は精製されている。

白磁

椀c（27）　V-2a類。

土製品

棒状土製品（28）　欠損が目立つため、全形は不明。一部煤が付着しているため、カマドの一部であった可能性も考えられる。

その他の遺構

3SX017出土遺物（Fig.12）

石製品

滑石加工品（29）　石鍋の鍔部をカットし、加工したもの。3.05×3.4×1.65cmを測る。

(5) 小結

遺構は平安時代後半頃からのものが殆どで、それ以前の遺構や遺物は殆ど検出していない。掘立柱建物は掘り方が小さく一般住居と考えられる。遺構は調査区の北東側に集中し、南西側は殆ど遺構はなく、地山の堆積状況から北西側のやや高かった部分は削平された可能性が考えられる。

IV、調査まとめ

以上のように平安時代後半になって住居が建てられていることは、前代までの大宰府政庁を中心する都市空間が、この地域にも広がりを見せ始めたことを示し、都市が平安時代後半頃から太宰府東側地域へ移行していったことを裏付ける結果となり、太宰府市の中世都市空間を考える上で貴重な成果を得ることができた。

また、周辺は試掘調査等によって、谷地形や削平された土地など遺構が存在しない地域を多く確認し、付近一帯の土地利用については不明な点も多い。

条坊と太宰府天満宮の間に位置するこの周辺は、調査例も少ないものの、条坊から安楽寺や天満宮への街の移り変わりを考える上で重要な地域であり、今後の調査に期待する。

Tab.1　典園遺跡第２次調査　遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別	時期	地区
1	SD001	溝	古代～中世	E2・3
2	SX002	ピット	古代～中世	E2
3		撹乱		D3
4	SX004	ピット	古代～中世	F3
5	SD005	溝	古代～中世	D2・3
6	SX006	ピット	古代～中世	E3
7	SD007	溝	古代～中世	A3
8	SX008	ピット	古代～中世	B4
9	SD009	溝　　埋土は黒色砂質土	古代～中世	A3
10	SX010	ピット	古代～中世	B2
11	SX011	ピット　埋土は黒色砂質土	古代～中世	B3

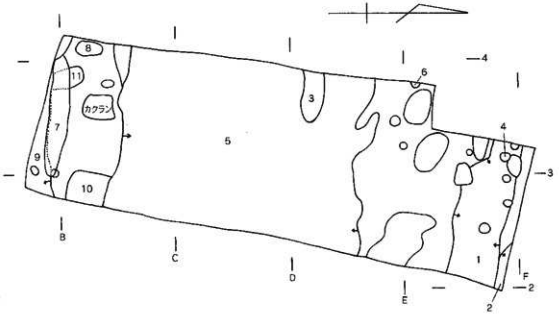


Fig.13　第2次調査略測図（1/100）

Tab.2 奥熊遺跡第2次調査 遺物一覧表

S-2

土師	器	破片

S-3

土師	器	破片
弥生土	器	壺×甕
土師	器	焼土塊
その	他	鉱滓

S-5

須恵	器	甕、壺
土師	器	丸平、坏a（赤）、小皿a、鉢鉢、脚付皿、鉢
瓦	器	鞴
龍泉窯系青磁		碗；破片（5）、上田C類（1）、IV（1）、I-2（1）
		皿；I（1）
瓦	類	破片（二重斜格子）、平瓦（斜格子）
石	製品	緑色硬質の礫、不明滑石
須恵質土	器	鉢（東播系）、甕
瑞産陶	器	甕（青磁）
白	磁	碗；IV（2）、II（1）、V（1）、破片（2）
		皿；IX（1）、VIII-1-C（1）、破片（5）
中国陶	器	壺；破片
須恵質（輸入）		破片
金属	製品	鉱滓
土	製品	焼土塊
その	他	炭化物

S-4

土師	器	坏

S-5 灰茶色土

須恵	器	坏a、坏c、甕
土師	器	坏a、鉢、小皿a（赤）
瓦	器	小皿c、破片
龍泉窯系青磁		碗；II（1）
		皿；I（1）
		格器種；破片（2）
同安窯系青磁		皿；破片（1）
高麗青	磁	碗；破片（1）
瓦	類	平瓦（斜格子）
石	製品	緑色片岩礫片、平玉石、滑石破片
須恵質土	器	鉢、破片
瓦質土	器	火鉢（14～15c）
白	磁	碗；破片（1）
		皿；破片（5）
		仮他；破片（2）
中国陶	器	格器種；甕
須恵質（輸入）		壺
金属	製品	鉱滓
土	製品	焼土塊

S-7

須恵	器	甕×壺
土師	器	擂鉢、小皿、破片
龍泉窯系青磁		碗；II-b（1）
須恵質土	器	壺
白	磁	皿；IV～VI（1）

S-8

土師	器	破片

S-9

須恵	器	破片
土師	器	破片
土	製品	焼土塊（鉱滓が著く）

S-10

須恵	器	破片
土師	器	坏a（赤）、小皿a（赤）

茶灰色土（包含層）

須恵	器	壺
土師	器	坏a（赤ヘラ）、甕、小皿a（赤）、小皿b（赤）
黒色土	器	破片
龍泉窯系青磁		皿；I（1）
同安窯系青磁		碗；I-1b（2）
瓦	類	平瓦（いぶし）（斜格子）（二重斜格子）
土師質土	器	鉢
須恵質土	器	破片
瓦質土	器	破片、壺?
瑞産陶	器	破片（黄褐）、擂鉢
白	磁	碗；IV-2（1）、II（1）、V-4-c（1）
		皿；IX（1）、IV-1-b（1）、破片（1）
		型抜；破片（2）、壺（横耳）（1）
中国陶	器	壺；破片
李	朝	粉青沙器（壺?）（1）
土	製品	焼土塊

黄灰褐色土

須恵	器	破片
土師	器	坏a（赤）
黒色土	器	破片
瓦	類	平瓦（斜格子）
白	磁	壺蓋；破片（1）

表土

土師	器	坏a、破片
瑞産陶	器	皿（1）
土	製品	焼土塊

Tab.3　奥園遺跡第3次調査　遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別	時期	地区
1	3SB001	掘立柱建物	12世紀以降	C.D2.3
2		土坑　　遺物取り上げ土層は機械的に分層	平安後期以降	D1
3	3SK003	土坑	XV期前後	D1
4		土坑		C3
5	3SK005	土坑	XV期前後	D3
6		ピット群		C2
7		ピット群		C2
8		ピット群		D2
9		土坑群		D2
10	3SK010	土坑	XII～XIII期	D4
11		ピット群		D3
12		ピット群		E3
13		ピット群		E2
14		ピット群		C3
15	3SB015	総立柱建物	12世紀以降	D.E2～4
16		土坑		C3
17	3SX017	溜まり	12世紀以降	DE4
18		ピット群		D4
19		ピット群		C4
20	3SK020	土坑	XV期前後	E4
21		土坑	12世紀以降	E4
22		土坑	12世紀以降	E3
23		ピット群		D6.7

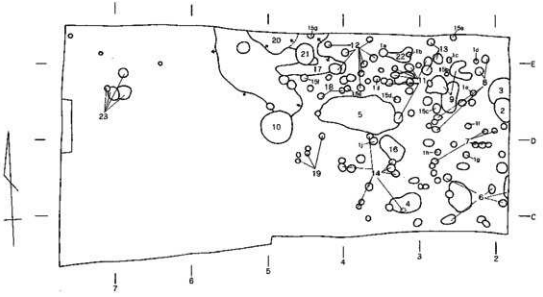


Fig.14 第3次調査略測図（1/150）

Tab.4 奥園遺跡第3次調査 遺物一覧表

S-1g

土	師	器	小皿a？、坏a、坏破片

S-1i

土	師	器	坏a

S-1j

土	師	器	小皿a、丸底坏a、坏破片
瓦		器	鞴
石	製	品	砥石

S-2灰茶色土

土	師	器	小皿a、坏a、甕？
白		磁	鞴；V-4×VIII-1・3 (2)
青	白	磁	合子 (1)

S-2明灰色土

土	師	器	小皿a (糸)、坏、甕
瓦		器	鞴c
同安窯系青磁			鞴；破片 (1)
白		磁	鞴；V-4×VIII-1・3 (1)
			壺破片 (1)

S-3

土	師	器	小皿a (糸)、坏a、鞴c、甕
瓦		器	鞴
同安窯系青磁			鞴；I (1)
白		磁	鞴；V-1 (1)、IV-1a (1)
石	製	品	石錘破片
須恵質土器			擂鉢

S-4

土	師	器	小皿c

S-5暗灰色土

須	恵	器	壷1、甕
土	師	器	小皿a、坏a、坏c、鍋
黒色土器A			破片？
瓦		器	鞴、鞴c？
同安窯系青磁			鞴；IV-1b (1)
白		磁	鞴；V～VIII櫛目 (1)
			壺III (1)
中	国	陶	器	E類 (1)
瓦		類	瓦玉

S-5黒灰色土

須	恵	器	壺×鉢、甕
土	師	器	小皿a (糸)、坏a、坏a (糸)、丸底坏a、高台、鍋
製	塩	土	器	焼塩壺？
瓦		器	鞴、鞴c、破片
白		磁	鞴；IV-1 (1)、V-1d (1)、V～VIII外反 (1)、VIII (1)

S-5灰茶色土

須	恵	器	坏破片、甕、破片
土	師	器	小皿a (糸)、坏、坏a、坏a (糸)、丸底坏a、鍋、甕？
瓦		器	鞴？
須恵質土器			擂鉢
白		磁	鞴；II (1)、破片 (1)、VIII？ (1)、IV (2)、IV-1a (1)
			IV～VIII (1)、V-1×VIII-2 (1)
			皿；IX-2 (1)
中	国	陶	器	壺；耳壺 (1)
			E類 (1)
土	製	品	不明土製品
瓦		類	平瓦 (縄)
石	製	品	石鍋、砥石、鞴片 (安山岩)

S-6

土	師	器	小皿a、坏a、甕
瓦		器	鞴
土	製	品	桃土鐘

S-7

土	師	器	小皿a (糸)、坏a (糸)、鞴c、甕
黒色土器B			鞴
瓦		類	瓦玉
石	製	品	滑石加工品

S-8

須	恵	器	坏c
土	師	器	小皿a (ヘラ？)、小皿a、坏、甕
黒色土器A			破片
金属製品			鉄製品破片

S-9

須	恵	器	坏c、甕、破片
土	師	器	坏a (ヘラ？)、丸底坏a？、小皿a (糸)
瓦		器	破片
石	製	品	砥片 (安山岩)
中	国	陶	器	破片Ab (1)

S-10

須	恵	器	壷3、甕、小壷、破片
土	師	器	小皿a、坏a、坏a (糸)、丸底坏a、坏破片、鞴c、甕、壷
瓦		器	鞴、鞴c
瓦	質	土	器	擂鉢
地方窯系青磁			鞴；破片？ (1)
高麗	青	磁	鞴；III-1 (1)
白	磁	鞴；II (3)、IV (2)、IV～VIII (7)、V～VIII外反 (2)、V-1×VIII-2 (2)、VIII (1)、VIII-2 (3)
		皿；V～VII (1)、II×III (1)
中	国	陶	器	壺；耳壺V-2 (2)、水注×耳壺 (1)
瓦		類	平瓦 (格子)、瓦玉
石	製	品	滑石製品、石錘？

S-11

須	恵	器	坏破片
土	師	器	丸底坏a、坏a (糸)、坏破片、甕、
黒色土器A			破片？
白		磁	鞴；IV (1)、櫛目 (1)、IV～VIII (1)
中	国	陶	器	壺；破片 (1)

S-12

須	恵	器	壷3、破片
土	師	器	小皿a (糸)、小皿a、丸底坏a？、坏破片

S-13

土	師	器	坏破片、鞴c
青		磁	破片 (1)
白		磁	鞴；V-1×VIII-2 (1)

S-14

須	恵	器	甕？
土	師	器	小皿a、坏a (糸)
瓦		器	皿a
瓦		類	破片 (無文)

S-15a

土	師	器	破片
白		磁	鞴；IV～VIII (1)

S-15c

須	恵	器	破片
土	師	器	破片

S-15d

土	師	器	小皿a (糸)、破片

S-15f

土	師	器	坏a (糸)、坏破片

S-16

土	師	器	坏a (糸)、坏、鞴c、鞴c、鉢？、甕
瓦		器	鞴
須恵質土器			破片
白		磁	鞴；櫛目 (1)、IV (1)、IV～VIII (1)

S-17

須	恵	器	破片
土	師	器	小皿a (糸)、坏a (糸)、坏a、坏破片、丸底坏a、甕、煮炊き具
石	製	品	砥片 (凝灰石)、滑石加工品
白		磁	鞴；IV～VIII (1)
中	国	陶	器	E類破片 (1)

S-18

須	恵	器	甕
土	師	器	小皿a、坏、甕×鉢
同安窯系青磁			鞴；破片 (1)

S-19

土	師	器	丸底坏c、坏破片

S-20灰茶色土

須恵器		坏c、甕、瓶、破片
土師器		小皿a（赤）、坏a（赤）、坏a（ヘラ）、坏c、丸底坏a?、甕
黒色土器		破片？
瓦器		鍋、鉢c
緑釉陶器系青磁		椀；被破片？（1）
須恵質土器		鉢
白磁		椀；IV～VIII（1）、V～VIII縁目（1）、V（2）、V-4b（1）
		V-4a×VIII-1×3（1）
		皿；VI～1b（1）
中国陶磁		耳壺？（1）
瓦類		平瓦（格子）、破片
石製品		滑石製品
土製品		紡錘

S-20黒灰色土

須恵器		坏、破片
土師器		小皿a、坏a（赤）、甕
黒色土器		破片
瓦器		鍋、高台
白磁		椀；V-2a（1）、V-4×VIII-1・3（1）
		皿；IV-1b（1）

S-21

須恵器		甕
土師器		小皿a、小皿a（赤）、坏、丸底坏a
白磁		椀；II-1（1）

S-22

土師器		坏a（赤）、破片

S-23

土師器		小皿a（赤）、坏破片

灰茶色土

須恵器		坏破片、大坏c、坏c、甕、破片
土師器		小皿a（赤）、羽釜?、坏a、坏a（赤）、坏c、坏破片、甕
瓦器		鍋、鉢c
白磁		椀；IV（2）、縁目（1）、IV～VIII（2）、VI-1b（1）
		V-4×VIII-1×3（1）、V-1×VIII-2（4）、V～VIII外反（1）
		皿；III-1（1）、VIII？（1）
		鉢破片（1）、水注口（1）
中国陶磁		破片（1）
瓦類		平瓦、破片
石製品		砥片
金属製品		鞴落？

表土

石製品		砥片（黒曜石）

Tab.5 真間遺跡第3次調査 土器・瓦器の計測表

A：内底ナデ B：底切还元

S-2明灰色土

種別	器種		遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a	イト	M-001		8.8	1.3	6.9	○	○
瓦器	鉢c	—	M-002		—	4.0+α	(7.6)		

S-3

種別	器種		遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a	イト	R-001	Fig.11-2	(9.4)	0.9	(7.5)	○	?
	〃	〃	R-002	Fig.11-1	(9.0)	1.1	(7.2)	○	?
	坏a		R-003	Fig.11-3	(14.9)	2.8	(10.6)	不明	

S-4

種別	器種		遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿c	イト	M-004		9.6	1.3	5.8	○	×

S-5 灰茶色土

種別	器種		遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	鉢c	イト	R-001	Fig.11-6	—	—	(11.0)	○	○

S-5 暗灰色土

種別	器種		遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a	—	R-001	Fig.11-8	(8.8)	0.8	(6.4)	—	—
	坏a	イト	R-002	Fig.11-9	—	—	(12.4)	○	—

S-5 黒灰色土

種別	器種		遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏a	イト	R-001	Fig.11-11	—	—	(10.2)	○	?
	丸底坏a	—	R-002	Fig.11-12	(17.5)	—	—	—	—

S-10

種別	器種		遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a	ヘラ	R-001	Fig.12-2	(9.6)	1.15	(8.1)	不明	?
	〃	?	R-002	Fig.12-4	(9.4)	1.1	(7.2)	〃	?
	〃	ヘラ	R-008	Fig.12-3	(9.8)	1.1	(7.6)	○	?
	〃	ヘラ？	R-009	Fig.12-5	(9.2)	1.4	(6.8)	○	?
	坏a	?	R-003	Fig.12-7	(15.4)	2.6	(11.2)	○	?
	〃	ヘラ	R-010	Fig.12-6	(15.0)	2.5	(10.6)	○	○
	〃	〃	R-011	Fig.12-8	—	-1.3+α	(10.8)	?	○
瓦器	椀		R-013	Fig.13-10	—	-2.8+α	(7.5)		
	〃	—	R-014	Fig.12-11	—	-1.7+α	(6.8)		

S-16

種別	器種		遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏a	イト	M-001		(16.0)	3.0	(11.2)	○	○

S-18

種別	器種		遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a	ヘラ	M-001		(8.4)	1.3	(6.4)	○	?

S-20 黒灰色土

種別	器種		遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a	—	R-001	Fig.12-25	—	—	(4.0)	○	○
	坏a	イト	R-002	Fig.12-26	(16.2)	1.8	(12.6)	○	○
	〃	〃	M-001		—	—	(13.2)	○	—

S-20 灰茶色土

種別	器種		遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a	イト	R-001	Fig.12-17	(10.1)	1.2	(7.8)	○	○
	〃	〃	R-002	Fig.12-18	(9.8)	0.9	(8.0)	○	—
	〃	〃	R-003	Fig.12-19	(9.8)	0.95	(7.5)	—	○
	〃	〃	R-004	Fig.12-20	(10.0)	1.0	(7.4)	○	—
	〃	—	R-005	Fig.12-21	(8.8)	0.9	(6.5)	—	—
	坏a	〃	R-006	Fig.12-22	—	—	11.5	○	○
瓦器	鉢c	—	R-007	Fig.12-23	—	—	(6.8)	—	—

S-21

種別	器種		遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
瓦器	椀		M-001		(15.2)	4.4+		—	—

写真図版

※写真中の番号は、図版番号を示す。

例　12 - 14

Fig.番号　挿図番号

第2次調査区北半部全景（北から）

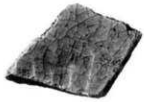
第2次調査区北半部全景（南から）

第2次調査区北半部東壁土層（西から）

第2次調査区南半部全景（南から）

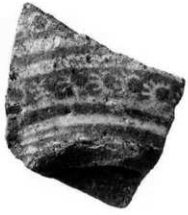
第2次調査区南半部全景（北から）

第2次調査区南半部西壁土層（東から、淡褐色粗砂までの掘削状況）



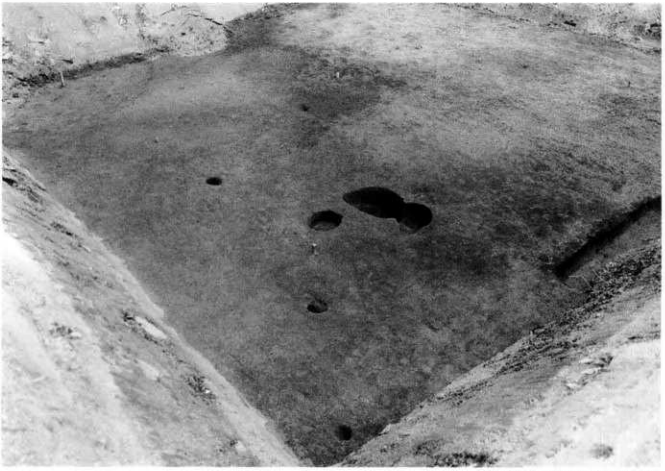
4-1

4-2

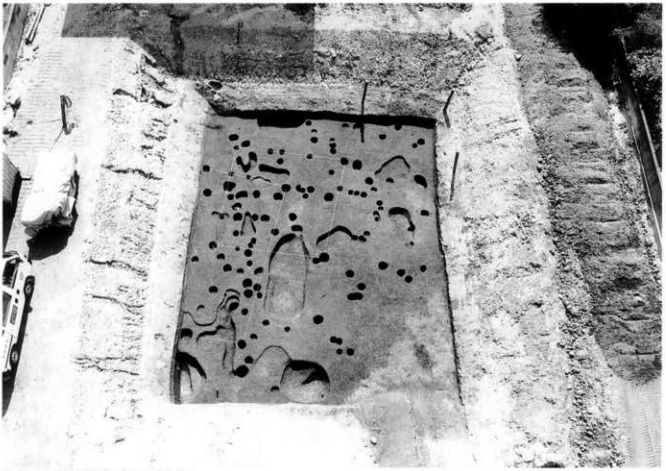


4-3

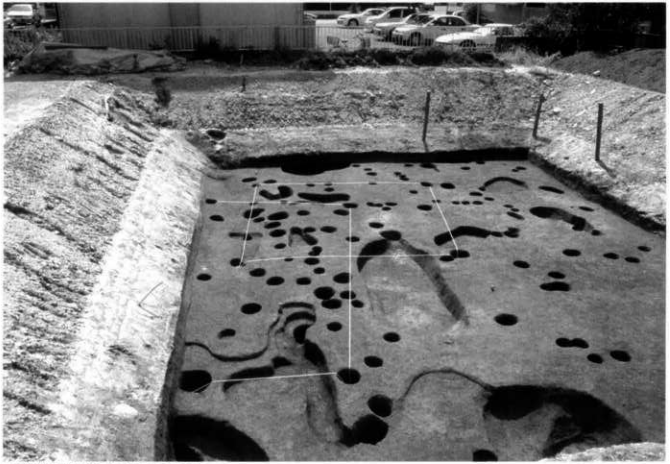
第3次調査東側全景（西から）



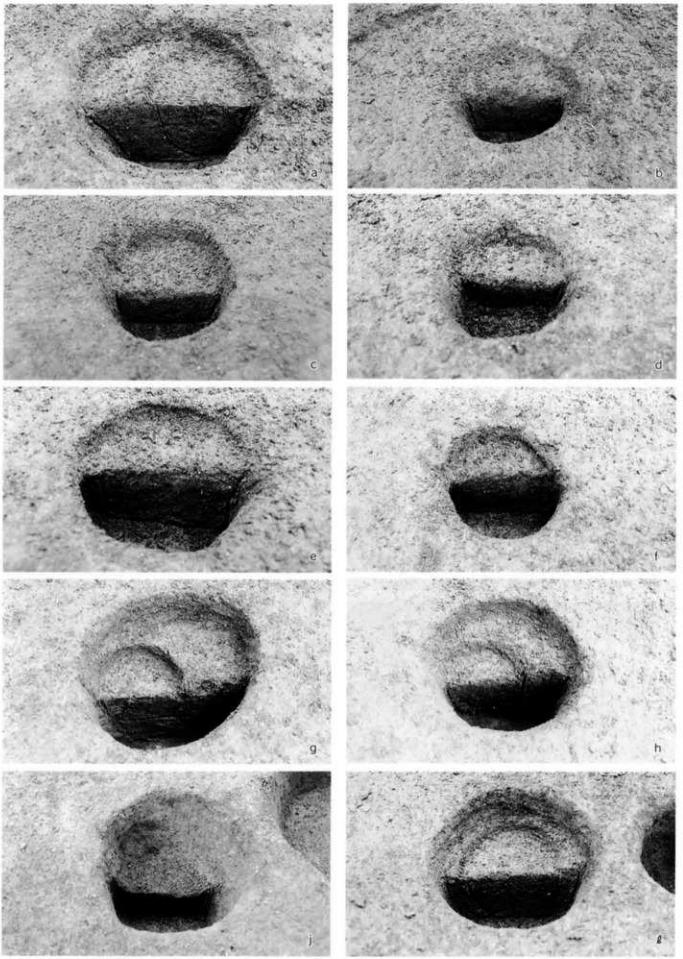
第3次調査西側全景（南西から）



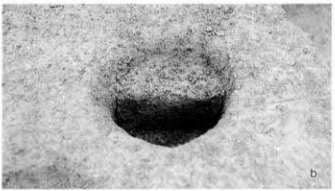
第3次調査掘立柱建物全景（西から）

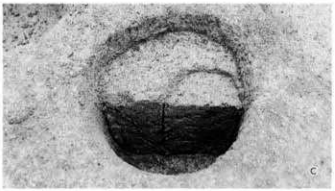


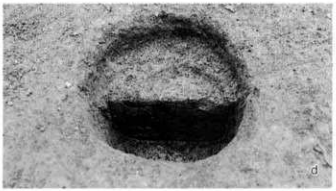
第3次調査掘立柱建物全景（西から）

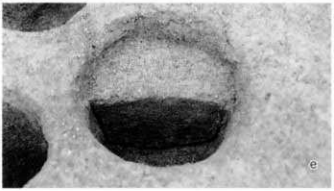


3SB001堀り方土層状況

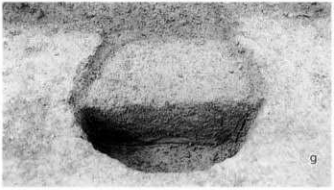


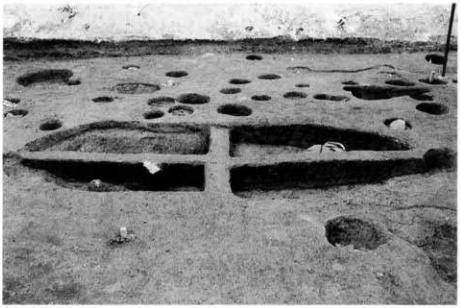






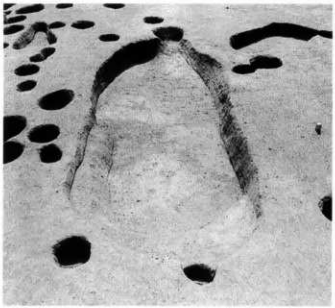
3SB015堀り方土層状況





第3次調査SK005土層堆積状況
（南から）

第3次調査SK005土層堆積状況
（西から）

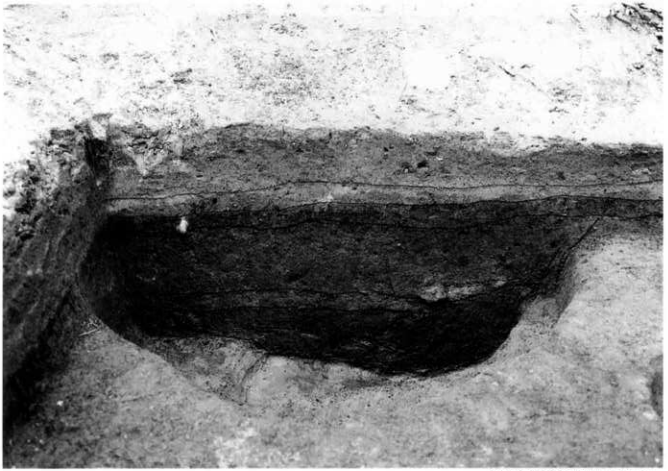


3SK005完掘状況（西から）

3SK005鉢出土状況（南から）

3SK010土層堆積状況（南から）

3SK010完掘状況（南から）



3SK020土層堆積状況（南から）

3SK020白磁椀出土状況（西から）

第3次調査上空より四王寺山（北西）を望む

第3次調査上空より観世音寺方面（西側）を望む

第3次調査上空より遠く宝満山（北東）を望む

11-7

3SK005出土捏鉢

12-27

3SK020出土白磁椀

12-14

3SK010出土高麗青磁椀

12-15

12-16

3SK010出土瓦玉

報告書抄録

ふりがな	おくぞのいせき
書名	奥園遺跡
副書名	第2・3次調査
シリーズ名	太宰府市の文化財
シリーズ巻号	64集
編者者	宮崎亮一、城戸康利
編集機関	太宰府市教育委員会
所在地	福岡県太宰府市観世音寺１丁目１番１号
発行年月日	2002（平成14）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	条坊 【推山推定案】	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	座標 X	Y	調査期間 開始	終了	調査面積 ㎡	調査原因
おくぞのいせき 奥園遺跡　第2次	条坊外	太宰府市 宰府2丁目	402214		57160.000	-43315.000	19951023	19951120	90	専用住宅建設
おくぞのいせき 奥園遺跡　第3次	条坊外	太宰府市 石坂1丁目	402214		56974.000	-43318.000	19990706	19990721	150	共同住宅建設

所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構	主要遺物	特記事項
奥園遺跡　第2次	集落	古代～中世	溝　ピット	白磁、青磁	
奥園遺跡　第3次	集落	平安・中世	掘立柱建物　土坑	土師器　須恵質土器　白磁	

太宰府市の文化財　第64集

奥園遺跡

―第2・3次調査―

平成14年3月

編　集　太宰府市教育委員会

発　行　太宰府市観世音寺1-1-1

印　刷　（株）三光　福岡営業所
福岡市博多区山王1-14-4